

# 水俣学通信

第 14 号  
2008.11.1

Newsletter from the Open Research Center for Minamata Studies



恵比寿様シリーズ3 坪谷の恵比寿様

## 目 次

水俣・芦北地域「子どもの食育パートナーシップ事業」……………2	第7期 水俣学講義 プログラム……………5
宮北隆志	報告：
論説：	新たな経験積んだ熊本学園大学と琵琶湖市民大学合同の水俣合宿・フィールドワーク……………6
環境病跡学……………4	福祉環境学フィールドワークⅠ
原田正純	水俣現地研修……………7
水俣学研究センター特別企画 特別講座・水俣学現地研究センター見学会報告	日録・水俣学研究センター研究員研究業績……………8
「水俣と私」……………5	
大澤 孝	

## 水俣・芦北地域「子どもの食育パートナーシップ事業」

水俣学現地研究センター長 宮北隆志

### パートナーシップ事業の枠組み

近年の「食と農」を取り巻く環境の変化を受けて、人と人、人と自然とのつながりを取り戻すことを基本に、持続可能な地域社会の実現をも視野に入れた「包括的な食育」の重要性についての認識が高まる中、熊本県芦北地域振興局管内の水俣市、津奈木町、芦北町の1市2町において、中長期的な展望のもと取り組まれている事業である。健康な地域づくりの理念として広く知られているヘルスプロモーションの理念に基づき企画・立案されたもので、幼児、並びに、小学生（子ども）の食育にターゲットを絞り、多様な関係者の連携・協働（パートナーシップ）の重要性を強く意識した点に特徴がある。単年度ではなく、2003年度（平成15年度）より5カ年計画で事業の枠組みが作成され、事業開始から5年目に当たる昨年度（2007年度）には、プロセス評価を含む事業評価と、各市町における食育実施計画の見直しが行われた。今回は、筆者がアドバイザーとして関わってきたこの事業の概要と今後の課題について紹介したい。

### 健康な地域づくりの理念としての「ヘルスプロモーション」

世界保健機構（WHO）が1986年にカナダのオタワで開催した総会で採択されたオタワ憲章には、「ヘルスプロモーションとは、人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセスである」とあり、一人ひとりの個人が、その個人を取り巻く「環境（社会的環境を含む）」を健康に資する（プラスになる）ように改善し対処する力をつける、その「プロセス」が重視されている。行政だけでなく地域の多様な関係者の参画を得て地域の課題を解決することが求められている今日、「ビジョン（めざす姿）」の実現と同等にまた、それ以上に大事にされるべきものが「プロセス」である。また、オタワ憲章には「健康は、QOL（生命・生活・人生の質）を高める最も重要な資源である」ともあり、「健康は、人が生きていく上での最終目標ではない」という考え方が明確に示されている。

ヘルスプロモーションの理念に基づく健康な地域づくりは、「個人技術の開発」、「地域活動の強化」、そして、「支援的な環境づくり」を基本に、「公共政策と健康サービスの方向転換」を、行政内の各部局間の連携

と市民／NPO・民間事業者との協働で進めるものである。

### 「食育連携会議」の設置による「めざす姿」の確認と共有

子どもの食と健康に関わる事業にそれぞれの立場で取り組んできた1市2町のそれぞれの関係機関が、食を取り巻く情報を共有し議論する「場」としての「食育連携会議」が、2003年度（平成15年度）に立ち上げられた。この「連携会議」では、まず、ヘルスプロモーションの理念についての参加者の共通理解を深め、この地域の子どもの「めざす姿（QOL）」を描き出し、それを実現するための枠組み作り、各市町独自の食育推進計画の骨格としている。

子ども自身が「食べ物を選択する能力」、「食べ物の育ちを感じる能力」、「食文化を継承する能力」を身につけるために「家庭や地域のサポート」があり、「食環境の整備」がなされることが、子どもたちの「食行動（食生活目標）」を改善し、「健康度（健康目標）」を高め、水俣・芦北地域の子どもたちが「ふるさとを愛し誇りに思う子ども、自然に親しみ思いやりのある子ども」に育つという最終目標の実現につながるという枠組みである。意識啓発だけではライフスタイルの転換は容易ではない。行動変容を実現するしくみづくり（支援的な環境づくり）の重要性が強く認識されていたことが、この事業のポイントと言える。

### 食育推進計画の策定による「明解なプロセス」の確認と共有

2004年度（平成16年度）には、3つの市町において食育計画策定部会が、関係者／機関の参加によって立ち上げられ、それぞれの地域の特性を生かした食育推進計画が、全国の市町村で初めて策定された。この策定部会では、多様な参加者が、地域の子どもの「食」を取り巻く問題や「めざす姿」を共有し、それらの改善や解決に必要な条件について、従来の取り組みの問題点や限界も含めて議論している。

この議論の過程で整理された既存の取り組みは多岐にわたっており、個々の取り組みの目的や成果を関係者が再確認することにより、既存の事業を多様な関係者が連携・協働することが可能な事業へと再構築できたと考えられる。



地域振興局レベルで設置された「連携会議」だけではなく、3つの市町に設けられた「計画策定部会」においても、事業の最終目標（子どものめざす姿）とその実現に向けた具体的な道筋が、多様な関係者間で確認・共有されたことの意義は大きい。

### 地域で活動するグループやNPOとの連携・協働

各市町における「計画策定部会」は、2005年度（平成17年度）には、「計画推進部会」に生まれ変わり、多様な関係者の参加によって策定された計画に沿って、保育園、幼稚園、小学校などにおいて様々な事業が展開されている。

各市町の食育推進計画に記載された事業の実施状況については、実施回数や連携機関数などについての詳細な調査が毎年行われており、高い優先順位をつけられた事業の多くが、多様な関係者との連携を深めながら着実に実施されていることが確認されている。

また一方では、地域住民主体の食育体験の拠点づくり事業、並びに、世代交流をととした食文化継承事業が、熊本県パートナーシップ創造事業（NPOからの提案公募型事業）の一つとして、地元のNPO法人水俣教育旅行プランニングや地域で活動する栄養士が中心となる「食育おたすけ隊」などに事業委託されている。このような地元NPOの特性を活かした「提案公募型事業」の拡大が、地域に根ざした、持続可能で、より効果的な食育の実践を生み出していくものと考えられる。

### 今後の展開に向けて共有すべき理念と課題

事業開始から6年目の今、縦糸としての「ヘルスプロモーション」の理念と、横糸としての「持続可能な地域社会の構築」という考え方を、関係者間で改めて確認し共有することが重要であるとの認識が高まりつつある。

QOL（生命・生活・人生の質）を高める最も重要な資源として健康を捉え、「子ども自身の能力」、「家庭や地域のサポート」、「食環境の整備」という視点からの「支援的な環境づくり」を、関係機関の連携・協働を深化させることによってさらに推進することが強固な縦糸を生み出すことになると考えられる。また、大気、水、土壌といったいわゆる「環境」の側面だけでなく、「地域経済／雇用」、並びに、「社会的公正」の側面からも持続可能な地域社会の実現をめざすことが縦糸を支える強固な横糸を生み出すものと思われる。

この縦糸と横糸が、多様な生活者の協働によってきめ細やかに紡がれていくことが、子どものパートナーシップ事業における最終目標（「ふるさとを愛し誇りに思

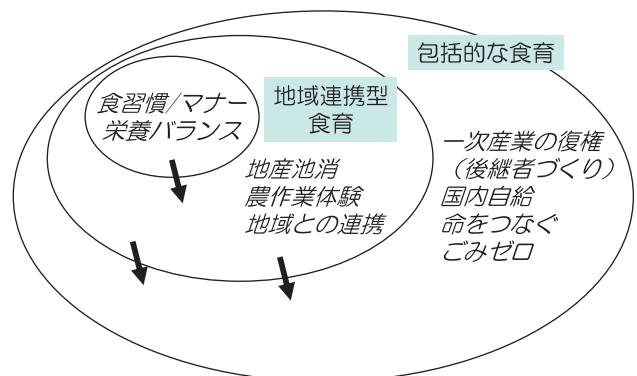
う子ども、自然に親しみ思いやりのある子ども」の実現につながるものと考えられている。

今後の課題として第一に上げられているのは、食習慣や栄養のバランスの改善に止まる食育から、人と人、人と自然とのつながりの回復をめざし、自給率の向上や自然産業（一次産業）の復権をも視野に入れた「包括的な食育」の実践への転換である（図）。食を食べること、命をいただくことを通して、人と生き物とのつながり、海と山のつながり、地域間のつながり、人と人とのつながり、世代間のつながり、命のつながりを感じることのできる子どもを、家庭・学校・地域の連携で育むための支援的な環境づくりが求められている。

次に、地域（水俣・芦北）でのつながりを、草の根グローバルイズムの視点から、いかにして世界の人々とのつながりへと発展させていくかという課題である。この課題に向き合うためには、「フェアトレード」や「フードマイレージ」、「バーチャルウォーター」など、環境・経済・社会の持続可能性を強く意識した視点が不可欠と考えられる。

最後に、当事者としての子どもの、体験を超えた事業への参画の実現、さらには、他世代への取り組みの拡がりも、今回紹介した水俣・芦北地域における子どものパートナーシップ事業の課題であることが関係者で確認されている。

水俣病の公式確認から半世紀、人類が初めて経験した「環境」と「母親の胎盤」を介した未曾有の食中毒事件に長年向き合ってきた不知火海沿岸の水俣市、津奈木町、芦北町の1市2町の連携で取り組まれてきた「食の安全・安心」を包括的に捉えた取り組みは、持続可能な地域社会の実現に向けた戦略的な取り組みの一つのモデルになり得ると考える。



参考：浜本奈鼓(2005)

図 「包括的な食育」の構成要素

## 《論説》

## 環境病跡学

精神医学および臨床心理学の一分野として「病跡学」(Pathography)という分野がある。熊本大学(旧)体質医学研究所気質学部の(故)鹿子木敏範教授が日本での草分けの第一人者で著書も訳書も多い。百科事典では「病跡学は精神医学の一分野で歴史的に著名な人物の精神医学的研究を行う学問」としかない。しかし、精神医学のれっきとした一つの専門分野で日本病跡学会という専門学会が半世紀近いの歴史を持っている。国際的にも認知された学問の一分野である。

病跡学について宮本忠雄教授は「精神的に傑出した歴史的人物の精神医学的伝記やその系統的研究」と定義している。福島章教授は「精神医学や心理学の知識をつかって、天才の個性と創造性を研究しようとするものをさす」とし、加藤敏教授は「学際的領域に位置して、創造性と精神的逸脱の関係を探ろうとする病跡学の独自性は、精神医学が築き上げた疾病概念や病態把握、および癒しといった観点から、人間の創造性に光を当てるといった問題枠に求められる」としているように、病跡学は本来、天才や傑出した人物の病理と創造性の研究であった。従って、その対象となる人物は限られていた。研究の手法の重要なものは残された作品、手紙、家族・友人など関係者の証言などである。

最近はその対象は卓越した芸術家にとどまらず傑出した政治家、独裁者あるいは時には、稀有な犯罪者にその対象が及ぶことがある。さらに「普通の」精神を病む患者の芸術活動からその病理を解明しようとするものや芸術療法など治療の一つとして語られたりするように枠組みが拡大されてきている。

話は飛躍するようだが本年(2008年)1月25日、熊本地裁で水俣病に関する1つの裁判の判決が下りた。結果は患者側の完全な敗訴であった。患者は工場排水口近く水俣病多発地帯に住む主婦で1974年に認定申請をした。その後、検診も行われないうちに77歳で死亡した。死亡後17年目(申請から21年後)に水俣病認定審査会は「判断できない」として棄却した。その間、家族は毎年命日近くなると熊本県に「どうなったか」と結果を問い合わせが、明確な回答はなく放置され続けたのである。行政の怠慢の責任は明らかであるが、控訴審では一審で否定された本人が水俣病であったかどうかという点も争点となる。水俣病は環境汚染による地域ぐるみ、家族ぐるみの健康破壊が特徴である。通

水俣学研究センター長 原田正純

常の疾病以上に疫学的条件が重視される。従って残された状況証拠をできるだけ集めれば診断可能であると考えた。

彼女の居住した集落は排水口があった水俣湾のさらに内湾の袋湾に沿ってあり、彼女の家は海から1キロしか離れていない(写真)。この地区の住民は当時、貝類を採りに毎日のように海辺に通うのが暮らしの習いであった。そして村人は水俣湾の魚を採ったり、お互いに譲り合ったり、買ったりして多食した。したがって、患者の住む向こう三軒両隣で認定患者と確認できた者だけでも40人近くがいる。

さらに、同居していた息子夫婦、孫に水俣病に見られる症状が確認される。彼らは1996年の大和解の際に和解してしまっている。昭和37年生まれで同居の孫の胎毛からは16ppmの水銀が検出された。これはまだ魚貝類を食べてない新生児の頭髪であるから重要なことである。国際的には母親の頭髪水銀値の危険域でさえ20ppm前後とされている最近である。さらに、唯一残された本人の申請時の診断書には水俣病に特異な四肢に強い感覚障害の記載がある。これらを現地調査や家族の診察所見から本人が水俣病であった可能性が極めて高いことを証明した。

環境問題はしばしば事後に認知されることが多いことや、企業や行政の壁で証拠となる事実の確認が困難なことが少なくない。したがって、病跡学的手法も有効である。病跡学の専門家からは叱られそうだが公害被害者の立場から大いに活用されるべき手法の一つと考えている。これを勝手に「環境病跡学」と呼ぶことにする。

(熊本保険医新聞に掲載したものに加筆した)





《水俣学研究センター特別企画 特別講座・水俣学現地研究センター見学会報告》

# 「水俣と私」

経理課 大澤 孝

水俣と私は何かと縁があると勝手に思い込んでいたものの、実際に水俣には前部署で高校訪問したことしかなく、行きたいという思いだけが先行し、漸くその願いが叶ったのが先日の水俣訪問でした。

勝手な縁のひとつは、高校時代まで遡る話ですが、青春時代をともにした親友のひとりが、水俣の袋出身で、そのお父さんが水俣病患者支援運動に参加していた方だったこともあり、水俣の話をよく聞かされ、水俣を身近に感じていたことです。

そして、これまた勝手な縁ではあるのですが、私が大学に勤めはじめた頃、原田正純先生が学園大にいらっしゃったことと、先述した友人と同郷の方が国際交流センターに勤めていたという偶然が重なったことです。

そういった影響もあって、水俣関連の本、特に原田正純先生の著書を何冊か読ませていただき、水俣病には少なからず関心を持っておりました。余談ですが、先生のサインと印鑑付きの「水俣の赤い海」は私の宝物のひとつでデスクに大事に並べております。

原田先生の水俣学講義は2回受けさせていただき、NHKハイビジョンの100年インタビューも見させていただきましたが、本当に何回聞いても心に響き、優しく語り掛けてくれる先生の姿を涙なしでは見る事ができませんでした。特に、宝子として紹介された上

村智子さんのお話は、ユージン・スミスさんの写真を記憶していたこともあり、この子だったのかという感じで本当に心に響きました。いま私はふたりの子どもに恵まれ育児中ですが、智子さんの兄弟のように優しい子ども達に育って欲しいと心から思っています。

実際に水俣に行った感想は、こんな綺麗な海と空に囲まれている場所で水俣病が起こったのかという印象を強く持ちました。次回は、もう少し子ども達が大きくなって、一緒に水俣に行きたいと思っています。そして何かを感じ取って欲しいと願っています。

今回、水俣学通信に原稿依頼を受けたことも水俣とまたひとつ縁が出来たと勝手に思っています。



水俣市立水俣病資料館前にて

## 第7期 水俣学講義 (2008年度)

- 第1回 9月25日「水俣学事始め」  
原田正純 (熊本学園大学)
- 第2回 10月2日「社会的コンフリクトと水俣病」  
花田昌宣 (熊本学園大学)
- 第3回 10月9日「水俣病と社会的共通資本」  
宇沢弘文 (日本学士院会員、東京大学名誉教授)
- 第4回 10月16日「僕が写した愛しい水俣」  
塩田武史 (フリーカメラマン)
- 第5回 10月23日「水俣学が目指すもの」  
原田正純 (熊本学園大学)
- 第6回 11月6日「水俣病事件と地域社会・水俣」  
丸山定巳 (熊本大学名誉教授、  
水俣学研究センター客員研究員)

- 第7回 11月13日「あの頃のこと (昭和31年5月)(仮)」  
坂本フジエ (水俣病患者家族)
- 第8回 11月20日「足尾鉍毒事件は、終わっていない！」  
坂原辰男 (田中正造大学 事務局長)
- 第9回 11月27日 水俣病が映す「人間の政治」  
栗原 彬 (立命館大学教授、水俣フォーラム代表)
- 第10回 12月4日「新潟水俣病・胎児性水俣病(仮)」  
金田利子 (白梅学園大学教授)
- 第11回 12月11日「水俣病事件を経済学はどう受けとめるべきか(仮)」  
除本理史 (東京経済大学教授)
- 第12回 12月18日「公害認定から40年」  
富樫貞夫 (熊本学園大学)
- 第13回 1月8日「持続可能な地域社会の構築と「水俣学」」  
宮北隆志 (熊本学園大学)
- 第14回 1月15日「未定」

《報告》

## 新たな経験積んだ熊本学園大学と琵琶湖市民大学合同の水俣合宿・フィールドワーク

環境監視研究所所長 中地重晴

### はじめに

9月に熊本学園大学の大学院修士課程のフィールドワークに水俣まで押しかけ、参加させていただき、また、関西からの参加者の多くは、水俣訪問が初めてであり、貴重な経験を積ませていただき、一同感謝しております。

私たち琵琶湖市民大学関係者からすれば、「合宿・水俣市民大学」と勝手に呼んでいた今回の合同FWですが、盛りだくさんの講義とフィールドワーク、グループ討論に、若干消化不良気味の感じがしました。もったいないですね。

### 琵琶湖市民大学とは

水俣では活動の全体像をお話する機会がありませんでしたが、私たち琵琶湖市民大学は関西の水問題に取り組む研究者、市民、学生のネットワークです。校舎はありませんが、琵琶湖淀川水系という大きなフィールドを抱えています。元は、1980年代に瀬戸内海汚染総合調査団に参加していた大阪市大、神戸大、大阪大学の研究者が中心になり、関西で水問題に取り組む市民とともに琵琶湖淀川汚染総合調査団を結成し、琵琶湖から淀川にかけての水質汚染機構の解明と水道水中の発がん物質トリハロメタン生成などを問題提起しました。その後、調査団の活動は休止しましたが、調査に参加した研究者の多くが定年を迎える頃になり、調査技術の継承と若手研究者の育成という目的で、琵琶湖総合開発によって滋賀県内の下水道普及率が向上し、琵琶湖の水質は改善したのかを調べるために、「20年目の琵琶湖調査」を2003年に実施しました。

2004年からはその調査結果の報告や琵琶湖の現状未来を考える講演、船上での調査実習を組み合わせた合宿形式の公開講座「合宿・琵琶湖市民大学」を滋賀県湖北町尾上の朝日漁協会館で毎年実施してきました。受講者は学生から60代の方まで幅広い年齢の市民が数十名、毎回参加しています。

### 琵琶湖から水俣へ

2006年8月の3回目の合宿琵琶湖市民大学の際に、原田正純先生に記念講演をお願いしたところ、前々日に体調を崩され、休講となりました。原田先生の話が受講目的の参加者も多く、昨年11月に補講という形で、

京都で講演していただきました。その際、先生の体調に配慮し、花田先生に同行していただき、熊本学園大学で始められた水俣学とは何かをお話していただきました。質疑の中で、私たちの琵琶湖での活動と水俣学との共通点などを議論しました。

原田先生の講演終了後、乗り合わせたタクシーの中で、花田先生が筆者に、「水俣で琵琶湖市民大学しませんか」と切り出され、「考えてみます」と答えたところから、今夏の水俣での合同FWは船出することになりました。



20年目の琵琶湖調査 船上からのサンプリング

ちょうど、水俣では産業廃棄物の最終処分場計画も環境アセスメントが終わり、正念場を迎えていました。筆者の所属する環境監視研究所では処分場の環境汚染調査の経験もあり、いろいろとアドバイスすることもできます。水俣病、不知火海のことを学ぶだけでなく、水俣の将来を左右する処分場問題についてもフィールドワークで実感しようと、関西から学生も参加することだし、意見交換の時間もあったほうがよいだろうと、消化不良を引き起こすくらい盛りだくさんな今年の熊本学園大学のFWになった次第です。FWを通じ、調査や研究の視点が共有できたことは有意義だったと思います。参加した学生諸君にも刺激を与えたようです。

いろいろと勉強させてもらったお礼に、来年はぜひとも琵琶湖の畔で、熊本学園大学との合同FW、合宿をやりようと考えています。その中から、若手の研究者、市民活動家が育っていければと期待しています。



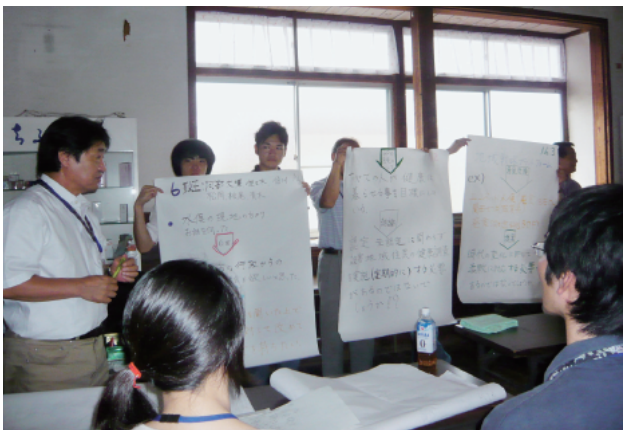
## 福祉環境学フィールドワークⅠ 水俣現地研修

大学院社会福祉学研究科 修士課程 一二三 晶代

2008年9月4日から7日までの4日間、大学院福祉環境学専攻の必修授業であるフィールドワークⅠを芦北町女島と水俣で行なった。参加者は、熊本学園大学大学院関係者20名に琵琶湖市民大学関係者28名を加え、総勢48名であった。

4日間の日程は、エクスカージョンとして①女島在住で水俣病患者連合代表である松崎忠男さんのお話、②水俣病患者多発地帯を見学し互助会会長である佐藤英樹さんのお話、③山下善寛さんによる案内で元産廃処分場建設計画の現場を歩き、水俣の水源を辿るという内容。講義は、山下善寛さん・原田正純先生・中地重晴先生・宮北隆志先生・花田昌宣先生・藤本延啓さんが行なった。その他、水俣病資料館の見学・水質調査などを行なった。

今回のフィールドワークでのメイン作業は、琵琶湖市民大学と熊本学園大学大学院のメンバーで構成するグループで各エクスカージョン・講義終了後に行なうグループワークであった。グループワークでは、何を感じて考えたかをメンバーで確認し合うことで情報の共有を行い、さらに議論をしていく形をとった。私が参加したグループは、琵琶湖市民大学のメンバー4名、熊本学園大学大学院メンバー3名の構成であった。

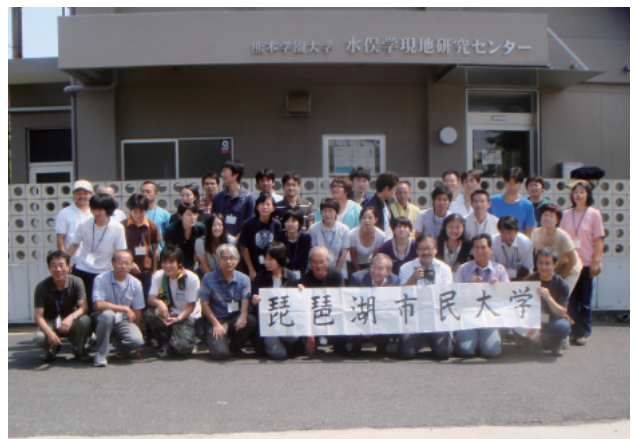


報告会の様子

グループワークでは、素直に感じた感想から議論を試みた。各々で感じる視点が同じようで違うということが実感できた。いろんな人の意見を聴くことで、自分自身の考えを深めることができるような気がした。文系、理系という立場の違いはあるけれども、議論を行なう際に壁は感じられなかった。感じている思いを素直に言い合い、話し合うことができたのではないかと

と思う。当事者の皆さんからの話は、胸にくるものがあったが、本当の苦しみや葛藤などは、一緒に生活し密着しないと見えてこないのではないかという話などを行なった。最終的には、「水俣病事件はこれからも続くもので終わらないものである」という結論に達した。グループワークを通じて、様々な方からの話を聞く中で、それぞれのスタートは違っていてもゴールは同じではないのかという結論が見えてきたのである。様々な立場からの水俣病事件へのアプローチがあることを知ることができたのではないかと思う。この4日間のフィールドワークで水俣病事件の全てが理解できたとは到底言えないが、すべては知ること感ることから始まることには違いないと私は思っているので、この体験をきっかけに、それぞれのフィールドで、どのようにして水俣学を進めていくかが問題なのであると考えている。

このフィールドワークでの私自身の最大の成果は、初心を思い出すことができたということだ。初めて水俣に研修に訪れた4年前を思い出した。水俣駅の目の前にチッソ工場の正門があることを実際に見ることで当時の影響力をみせつけられた。そして、綺麗な海に戻っていること、チッソ工場が現在も存在していることに驚くという、驚きの連続だった。初めて水俣を訪れた琵琶湖市民大学の方々と水俣をめぐる研修の中で、再び初心を感じる事となった。これから、自分自身の中での素直な感覚を忘れずに、水俣病事件と向き合い、自分なりの水俣学を発見していこうと改めて決意した。最後に、お世話になった関係者の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。



現地研究センターの前にて

## ■ ORC中間評価 ■

10月2日付けで評価結果が文科省私学助成課長から届き、水俣学研究センターはA評価（着実な進捗が見られる）を受けました。「『水俣学』の構築という社会的重要性の高い課題に、適切な研究組織を持って取り組み、着実な成果を上げていると認められる。（中略）国際的な経験／研究の交流と、成果の発信の面でも、大きな成果を期待したい。インターネットで「水俣学講義」を発信していることも特筆される」と書かれており、直前のHPもみて評価したようです。

## 水俣学研究センター日録

## 7月

- 4日 第13回チッソ労働運動史研究会 ゲスト：荒木誠之氏（元九大法学部・熊本学園大学教授、社会保障法）  
「安定賃金争議と労働委員会斡旋を語る」
- 7日 プラットフォーム世話人会（現地研究センター）
- 12～13日 第25回天草環境会議（苓北町）
- 18日 定例研究会
- 22日 熊本市力合小学校人権研修講演、原田
- 26～29日 台湾視察研修、宮北
- 31日 水俣学研究センター特別企画 特別講座

## 8月

- 1日 松野信夫議員現地センター見学
- 2日 水俣学研究センター特別企画本学職員研修水俣学現地研究センター見学会  
合志市人権教育研究大会、原田
- 4日 第13回水俣・芦北地域戦略プラットフォーム  
（現地研究センター）
- 5日 八代市部落解放研究集会、花田
- 5～6日 御所浦調査
- 12日 さつま町人権講演会、原田
- 21日 城山小学校、人権研修、花田
- 22日 九州衛生行政研究会（水俣）、宮北  
熊本市人権教育研究集会特別講話、花田
- 23日 環境首都コンテスト九州地区交流会（水俣）、宮北
- 23～24日 熊本県社会福祉士研修会、田尻
- 27日 熊本県立盲学校研修会、原田
- 29日 グリーン・フラッグ事業研修10名（水俣）、宮北

## 9月

- 4～7日 大学院福祉環境学専攻フィールドワークⅠ（水俣）
- 19日 JICA研修、原田（本学）
- 22日 大分県豊後大野市大野中学校水俣学習（本学）
- 25日 第7期水俣学講義開講（原田）
- 29日 ゼロ・ウェイスト円卓会議、宮北、藤本（水俣）
- 30日 第5期公開講座 第1回目「山間地集落の維持と再生」 山中進（熊本学園大学教授）

## ■ 水俣学研究センター 研究員研究業績 ■

(2008年度4月～9月)

## 原田正純

いのちを考える、—終末期医療の議論のために—、月刊保  
団連、No.974、16—19、2008、5。  
胎児性水俣病の教訓、化学史研究、35巻、2号、13—22、  
2008、6、25。  
特別講演「水俣にまなぶ、いのちの価値」、第81回日本ハン  
セン病学会、熊本市、2008、5、22。  
基調講演「水俣にまなぶ」、龍谷大学福祉フォーラム2008、  
『当事者主権の価値と実践』、大津市、2008、10、4。

## 宮北隆志

これからの50年について考える「場」としての「プラット  
フォーム」の試み。ごんずい、106号、2008、7  
「水俣学」と持続可能な社会の再構築(5)、水俣・芦北地域  
「子どもの食育パートナーシップ事業」の現状と課題。  
労働の科学、63(10)、624—628、2008  
「水俣学」と持続可能な社会の再構築(4)、「環境首都」をめ  
ざす水俣と産廃処分場建設計画(2)。労働の科学、63(8)、  
488—491、2008  
「水俣学」と持続可能な社会の再構築(3)、「環境首都」をめ  
ざす水俣と産廃処分場建設計画(1)。労働の科学、63(6)、  
360—363、2008  
「水俣学」と持続可能な社会の再構築(2)、「環境モデル都  
市」から「環境首都」をめざす水俣市の取り組み。労働  
の科学、63(4)、232—235、2008  
「水俣学」と持続可能な社会の再構築(1)、いまこそ、「失敗  
の教訓」を将来に生かすとき。労働の科学、63(2)、100  
—103、2008

## 高林秀明

単著『障害者・家族の生活問題—社会福祉の取り組む課題  
とは』ミネルヴァ書房、2008年5月  
共著『住民主体の地域福祉論—理論と実践』法律文化社、  
2008年6月  
編著『重度・重複障害者と家族の生活実態』きょうされん、  
2008年5月

## 田尻雅美

障害学会プレシポ「障害者としての胎児性水俣病患者」  
2008.5.17

## 編集後記

政治・経済が混迷し、政治家は変わり行く。しかし、被害者は変わることなく重荷を背負い続けている。この図式が変わることはないのだろうか。

## 水俣学通信

第14号 2008.11.1

編集／熊本学園大学水俣学研究センター 発行人／原田 正純  
連絡先／〒862-8680 熊本市大江2-5-1 熊本学園大学水俣学研究センター  
Tel : 096-364-8913(ダイヤルイン) Fax : 096-364-8913  
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/ E-mail:minamata@kumagaku.ac.jp  
印刷／ホープ印刷株式会社